

第3回

平成19年度新宿区次世代育成協議会

第一部会

平成20年2月12日(火)

新宿区福祉部子ども家庭課

1 開 会

○事務局

配布資料確認

- 資料1** 次世代育成協議会部会のまとめ(第1回・第2回)
- 資料2** 11月26日 第2回次世代育成協議会 全体の意見(まとめ)
- 資料3** 他自治体の取り組み事例
- 資料4** ホームスタート
- 資料5** 家庭の状況と支援の必要性
新宿区における子育て家庭への支援体制の変遷

2 議 題

(1)次世代育成協議会部会のまとめ(第1回・第2回)

資料1 福富部会長

(2)11月26日 第2回次世代育成協議会 全体の意見(まとめ)

資料2 福富部会長

福富部会長

今日が3回目の部会で、本年度の最後の本部会が3月に予定されている。今日は予定していることが盛りだくさんであるが、まずは、今までのところをざっと振り返り、他のいろいろな自治体等々で取り組んでいることについて、事務局並びに委員のほうから御報告いただきたい。それらを参考にして、この部会の主題と課題であるところの区民の虐待防止と地域の役割という問題について御協議いただきたいと思う。

何らかの形で今年度なりのまとめという形で、方向性が見出せばいいかと思う。具体的などころまではなかなか難しいのかもしれないが、来年度何をするのかということの方向性が確認できれば、それなりの成果があろうと思う。できるだけ具体的などころにまで持っていければと思う。いろいろ皆さんよろしく活発な御討議をして、今後に向けての建設的なご議論いただければと思う。

そこで、まず協議に入る前に、これまでの部会内と全体会での話し合を、振り返ってみたいと思うが、まず資料1では、アンケート調査を実施し、その結果については、皆様方のところに集計結果が配布されているところである。そして、最後のところで、一口に虐待と言

っても、極めて緊急性の高い深刻な状況と、それに対する措置、その虐待に至る前の家庭あるいは子供に対する支援という2つのものがあるのではないだろうか。前者については、それぞれの専門機関のところに対応いただくというのがこれまでであるし、これからもそのようなことになろうかと思う。特にこの会議では、後者の虐待に至る前の予防的な措置として、さて我々区民が何ができるだろうかというところでの協議という方向が1つ確認されたところである。

続いて資料2だが、これはその後、全体会等々での意見をまとめてみたものであります。

まず最初は、親子への支援策というものに対して、いかに周知させるかということが大事かということが言われた。そして2番目として、そういった家庭をいわば子育てを孤立させないということが1つの基本的な理念であるという問題、そして3番目としまして、緊急性の高い極めて深刻な虐待に対する対応ということに関しては、これはもう専門機関ということであるだろうし、それに対して、区民一人一人ができるというところは、むしろそこまで至らない予防的なところではないだろうかということが確認された。その際、4番目として、かといって市民が何か疑心暗鬼でみんなを監視し合うという体制は、これは決して好ましいわけではないということで、お互いに温かいまなざしでいうところが、基本的なことに考え方として区に常に確認していかなければならないということも話し合われた。

そして、そのことはごく普通の生活を送っている家庭というものに対し、ではどういう援助ができるかというのがかなり具体的な問題になってきた。さらに、その際に、6番目として、幾つかの段階にしてもらおうというか、時期というものがあるのではないだろうか、その時期その時期に応じて、かなり危機的なところを十分考えた上での対応という考え方が大事だということも御提言いただき、確認されたところである。

そして、具体的な支援ということになりますと、「ゆったりーの」の話も出た。その中で具体的に子育て支援者育成の養成講座というものを実際に実施されているという話、ところがその中で実際にその支援をして、講座を開いた後で、その講座を受講して十分資質を持っている人々が生かされるかとなると、十分それは生かされていない面もあるのではないだろうか。そのためには、さまざまなネットワークというものを構築しながら、そこですぐれた人材を生かすという手だても大事ではなからうかという話である。そして、そのネットワークも含め、いろいろな情報も埋もれているのではないだろうか、あるいは情報そのものが十分に活用されていない、あるいはそのため届いていない情報の仕方等々についても、幾つかなすべきものがあるのではないだろうかということも御提言いただいた。

そして、10番目としまして、精神的な疾患を持った人にはそれなりの専門的な対応が必要になるかと思うが、それに対していわゆる一般の家庭の中でも、あるいは普通家庭そのものが孤立化することによって、いろいろな問題を引き起こすことがあり得るんだというところで、そういった家庭に対するまなざしを確認することが必要だという話である。さらには、具体的にどう虐待の予防をどのように我々が担えるかというところについては、これからの大きな具体の課題になっていくのかもしれない。

実際に新宿区では、いろいろな国籍、あるいはないところも現にあるが、そうした文化の違いなども考慮しなければいけないだろうし、そういったものも含めた多様な対応をどうしたらいいのか、考えるべき課題は多々残されているんだろうと思う。

さらに4ページであるが、もう一つは、普通の家庭あるいは少し虐待が深刻化したり子育てにいろいろな意味で問題を持っている場合、家庭や人によっては、それをどこでどう相談したらいいのか、どういう対応をし、どういう形で相談をしたらいいのかというアクション自体が非常に困難な状況がある。したがって、じっと待つということだけが果たしていいのかということにもなってこようと。

そんなところで1つ具体的な提言というか、紹介されたのは、ホームスタートという外国の例、イギリスの例ではあるものの、具体的に、積極的にこっちの行政やある組織から出かけていくというようなかわりがあるというようなことで御紹介をいただいたところである。これは、それなりにこれからの区の対応ということも含め、何かそこに示唆、ヒントがあるやもしれないというところで私は感じたところである。

これについては、後ほどまた改めて御紹介したいと思うが、さて、それをどう具体化するのかとなると、市民のあるいはボランティア活動に頼らざるを得ない面もあるだろう。それをどのようにひっかけていけるのかという問題、あるいはそのボランティアに対する資質の向上というものをどのように行政が担えるのかということが関係しているのかもしれない。

そのようなことがずっと話されてきたわけだが、今ざっと振り返っただけでも、幾つか今後の対応、具体的などころが見え隠れしながらも、まだまだ具体化するには時間がかかるし、検討しなければいけないところがあるのかもしれない。そういったところが今までの状況である。

そこで、それを踏まえ、今回はさらに集約した御議論がなされればよいなど。ここでこれまでのお話し合いの中で、どうも言い足りなかったとか、こういった問題があるのではない

のかという御発言があれば、どうぞこの段階でまたお受けしたいと思うが、いかがか。

○委員

1つ学童保育ということの立場からいうと、やはり親たちというのは働いているので、自分たちの状態への気づきのための場になかなか参加することができないという状態にある。例えば、家庭教育学級とかいろいろな形で良い講座が開かれているが、私も出たいなと思うことがあるが、実は昼間なのでやはり出られないという実情がある。余裕がなくて両親とも10時ぐらいしか帰ってこないという人もやはりある。そうすると、結局学童の低学年の子たちはどうなるかということ、近所に知り合いがいれば頭を下げてお願いすることになるが、それ以外は、例えば塾を転々とさせて、居場所をはっきりさせておくということで、親は安心感を持つということである。例えば大体7時ぐらいまでしか、長いところで7時半ぐらいしか行けない。働く親たちが多分ふえてきている中でも、その親たちが出が悪いという人も、家庭や育児を振り返る時間を持てるようにどうするかという問題があるかと思うが。

もう一つは、子供たちを見守る態勢のことだが、これはいわゆる別に学校が悪いとかいうことではなく、横につながりがないということが出てくるが、つい最近までは、例えば学校に子供がかわいそうだとかいう電話がかかってきたときに、学校ルートでばあっと情報が流れていくものだった。やはり学校の先生たちが、自分のところの子供が放課後どんなことをしているかということが、やはりなかなか知られていないし、余裕がないのか、そういう状態である。小学校から学童クラブというところというのは、やはり本当は小学校で児童館とか福祉の関係のところがつながってほしいんですけども、やはりなかなか子供たちの今の状態をお互いに意見交換したり、どうやって応援しようかという、実は横の場が今ほとんど実態としてはないですね。ですから、その区の側の横のネットワークづくりについて、少し提案してぜひ考えていただきたい。何か一堂に会して地域の雰囲気とこんなことがあるよみたいなものをどうも交換するような場がないというのが、それはちょっと正直に言って何かもう少し何とかならないかというふうに思います。

○福富部会長

今までの体制の中身というネットワークは余りない。ちょっと質問させていただきたい。前からこういった御発言は、まだあるというふうに記憶しているが、その場合にネットワークでいろいろな情報を得るということは、非常にその先が大事である。いろいろな情報を各組織が知るということは、おわかりだと思うが、それを知ることによって、次の問題というのが発生してくる。

○委員

例えば、児童館とか学童クラブで、荒れている子がいことがよくあったらしい。例えばそういうことというのが、小学校でどんな姿をしているのかとかという両方が知り合った上で、その子を見守るという体制をつくってほしい。具体的に言うとそういうパターンになる。それぞれがそれぞれで心配したりしているいろいろやっているとは思いますが、やはりその子全体を見るためには、両方の情報があって初めてその両方がわかる。例えば学校ではいい子だけれども、児童館、学童では暴れ回っている子もいる。学校では通報されると親に言われるからそんなことをことはやらないし、学童でだって自分の出したいものから出してしまうことがある。だから、そういうのは例えば、気になる子の情報を互いに交換すればいいのではと思う。

○福富部会長

学校というのは、もうあの池田小学校の事件以来、学校の概念ががらっと変わってしまった。今まで学校というのは、とにかく安全な場だという神話が、今からすると神話かもしれないがそれまでであった。それが、がらっと崩壊してしまい、じゃどう対応していいのかということが、まだ歴史がつくられていないというか、そういう状況の中でいろいろな対応、いろいろな模索を今している段階だろうと思う。学校側からすると、学校の状況でいろいろな子供たちすべての周辺状況をすべて把握するということは、あればいいのかもしれないが、そのまま突っ込まれてしまうと、厳しい状況でもある。でも児童館、学童の方からいうと、学校の状況ではいい子だよという情報を得て、それでその先どういう情報が欲しいのか。

○委員

具体的に例えば、学童に来て暴れてかみつきますんですね。力づくで手当たり次第かみついたり、物を壊すという子供がいた。それは、その親はやはり両方とも働いていて、ほとんど一定の話しか返ってこない状態があり、やはり学童なので、どうしよとってその子を排除するわけにはいかない。やはり親たちから見ると、自分たちの子だけやらないでくれなんていう気持ちが出てくる。非常に苦しみながらも、その親に実情を伝えてみたいという思いがあった。そのときにやはり学校の様子はどうかとかいうのは少し僕なりに調べてみたら、学校ではやはりいろいろな問題を起こしていない。だけれども、学童では、一般で来た子にいきなり青あざができるぐらいかみつくといったことがあった。だから、そういう状態を少しは親にも伝えるべきだと思い、来てほしいという話をしたら、何であんなんかに言われるんだと怒られたが、でもそのことを親が知って、やはり悪いことをするとブラモデルを取り上げたり、いろいろなことを厳しくされるというのがあったみたいである。とにかく厳し

くされるので、我慢している。学童では自由に遊べるし、自由に気持ちを開放できるから、そんなようになってしまう感じがある。だから、そういう情報をどう生かすかというようなこと、次に例えば親に伝えて、少しかかわって話を聞いてもらうようなことをしてほしいというふうに言って、親のかかわりがふえたことがある。

○福富部会長

少々誤解というか、情報をやりとりする、情報をかかわることよりも、それが大事だというよりも、お互いに連携する中でどう協力体制がつくっていけるのかという問題ですね。そう理解していいか。

○委員

そのとおり。

○委員

今のお話にもあるように、新宿区の学童というのは、必ずしも小学校の中になくて、児童館に併設されていたりする。いわゆる学校単位で学童がないから、今の問題も出てくると思う。確かに、学童と地域の人たち、行政と地域と家庭と学校と学童が近いものが使われているようなものもあると思うんで、福祉分野でもそういうふうな学校の中に学童をつくるということで、解決できることがあると思う。児童館もやはり地域貢献の場所づくりということに関し、新しい考えによってつくっていく必要があると思う。6番のつけ足しになると思うが、加えていただきたいということである。

○福富部会長

いろいろな行政の中で体系づくりというのをやってみないとわからない。

○委員

今、実情として児童館のあることで、幾つかの学校から学童に来ているというのがほとんどである、そういういろいろな学校から来ているという学校があるとしたら、やはり学校の中につくるというと、その学校しか行けない。私は、ポータブル機関があって、例えば保育園と一緒にあって、それで総合的なところに子供たちがいるというのは、新宿区のあり方とすれば非常にいいと思う。学校に学童クラブを併設することは、安定感はあると思うが、それはちょっと違う今までの要素がある。

○福富部会長

学童を学校の中に置くべきか、いや、違う、これはいろいろ議論があるだろうし、それなりの一長一短というのはあるだろうと思う。だから、どう置かねばならないという議論とい

うのは余り言うべきではないし、それぞれの状況の中で補充点があればそこで改善をしていけばいいかなというふうにも思う。

それでは、先へ進ませていただきたいと思うが、これまでの協議の中で、評価というものはなかなか難しい。やはり実際に虐待に至る前の、普通というか、家庭、子育てをしている家庭に対して区が支援できるのか、そのために何が取り組めるのかという問題になりますと、とりあえずは、虐待に至る前の家庭に対する対応というものが、突然浮かび上がってきたんではないかと思う。

そこで、これまでのそういった問題意識の中で、いろいろな実態が具体的にもう実践をされているという取り組みが、幾つかあると聞いている。そこで、これからの議論の参考にもなるかと思うので、他の自治体の取り組み状況について、事務局の方で吟味していただいたとなので、それも少し御紹介いただきたい。

(3) 様々な取り組み事例の報告

他の自治体の取り組み **資料3** 子ども家庭課

世田谷区

- ・産前・産後プロジェクト（さんさんサポート）
- ・学生ボランティア派遣事業

荒川区

- ・みんなの実家プロジェクト「35（産後）サポネットinあらかわ」

八王子市

- ・子育て応援団（Beeネット）

○事務局

お手元の資料3、今日、世田谷区と荒川区と八王子市の3例を皆さんに御紹介しようと思っている。この世田谷区と八王子市については、昨年末に東京都主催の「子ども家庭支援事業にかかわる連絡会」という連絡会があり、そこで発表された方々と個別に御連絡をとらせていただいております。

それから、荒川区については、うちの子ども家庭支援センター館長のほうから情報をもらい、荒川区の主管課にお電話をさせていただきお話を伺ったものである。伝聞情報ですので、きちんと御説明できるか不安であるが、私のわかる範囲で御説明をしていきたいと思う。

まず、世田谷区だが、2つの事例について御説明をする。産前・産後プロジェクトということで、「さんさんサポート」という愛称がついている。この特徴は、出産予定日の1カ月

前から出産後五、六カ月までという出産前からフォローしようという事業であることである。子育て支援ヘルパーがお手伝するというので、ヘルパーさんが出産前、出産後の御家庭に訪ねていく。さんさんサポート利用方法というのを見ていただくと、ステップ1のところ、出張所等で妊娠届を出された方に、母子の保健バッグと一緒にお渡ししますというものが、その裏面の3ページにありますはがきとあとヘルパーの利用券である。これで御希望の方が自分で住所を記入して送るのが取りかかりになる。ステップ3のところ、それから利用券が届いたら事業者さんに電話をして、いつ希望したいですというのを申し込み、それで支援ヘルパーさんが来るという流れになっているんですね。

それで4ページ、ここのところがちょっと仕掛けの部分だが、世田谷区さんさんサポート事業利用者アンケートである。この事業を3回まで無料で利用できますということで、1回目、2回目、3回目ということで、このアンケートに記入をしてもらうということになっており、ここで緊急性が大変ある御家庭なのか、やや緊急性が高い御家庭なのか、まあ普通の状態におられるのか、3段階に振り分けて、それでその後の対応を変えていくということである。

7ページの上にありますのが、産前・産後さんさんサポートフォロー図で、左側のほうに申し込みから利用券発行、子育て支援ヘルパー訪問というのがあり、ここで書いてもらったアンケートをもとに、次にママサポートっていうのに入っていく。ここのところで、保育士や栄養士、保健師につながっていくということで、次の段階のフォローに入っていくと。ここからさらに保健医療支援、福祉支援、地域支援というふうに、それぞれの適切な機関につながっていくような仕組みになっている。ここに世田谷での利用実績、数字で上がっておりますけれども、利用ありっていうのが6カ月間、1年間ということで、それぞれ7%、14%というような内容が出ている。

8ページの下のところを見ていただきますと、産前・産後支援事業の効果と課題ということで、児童虐待の早期発見・予防に効果的の事業、それからこれからの利用率の向上をすることが課題であると、あと、「こんにちは赤ちゃん訪問事業」との連携が必要と、あと、実際にこの事業がどうなのかというところで、事業評価の検討が必要であるというようなことを挙げておられる。さんさんサポートについては以上である。

9ページ、学生ボランティア派遣事業、これも世田谷区でやっている事業だが、これはいわゆる東京都のメンタルフレンドの世田谷区バージョンに似ているのかと思う。どちらかという、親御さんに対してというよりも、子供さんに対する学習支援というようなところが

メインになっているけれども、実は親御さんの支援にもなってくような事業である。ここで応援学生、大学、大学院生などということで、この9ページの流れ図を見ていただくと、御家庭から申し込みがあって、子育て総合センターというところでマッチングをし、それでボランティア派遣へとつながっていく。このボランティア学生さんの育成の仕組みというのが、ボランティア学生さんがボランティアしたいという方が申し込みをし、研修を受けて、それで登録をした方が学習支援に入るといような流れになる。実際にこの御説明があったときに、この学生さん自身が結構重い家庭に入っていらっしゃるとい話を伺ので、その学習支援に入っていらっしゃる学生さんたちへのフォロー態勢というのはどうなっているんでしょうかと伺ったところ、都立梅ヶ丘病院の精神科医の方がバックに入っておられた。その先生、ドクターのほうで定期的にケースカンファレンス等を行い、学生に対してアドバイスをしていると。随時、派遣されるごとに学生から報告を求めている、特に緊急性がある、行ったけれどもドアをあけてもらえなかったとか、そういったことがあった場合には、もうとにかくすぐに連絡するよというふうになっているというよなお話であった。

これのデメリットとしては、学生ボランティアさんなので、学生さんが卒業してしまうと、次の方をまた育成しなければいけないというところで、次のいい人材がまた循環して出てくれるのが課題というよなお話をおっしゃっていた。

13ページ、荒川区である。これおもしろいなと思ったのが、この荒川区の事業名が、「みんなの実家プロジェクト」という名前である。「みんなの実家プロジェクト」という事業の中で、「35(産後)サポネットin荒川」というところで、首都大学東京健康福祉学部の教授で、助産師でもおられる恵美須文枝先生の発案でNPO法人と社会福祉協議会等が連携して実施していると紹介をされている。

ここでも学生さんが活躍しており、助産師とか看護師、保育師を目指している学生さんたちを活用し、ここで育児支援、家庭訪問をしている産後支援ボランティアと、あと駅のそばの一軒家を借りまして、そこで子供さんを預かるという事業の2事業で構成されているそうである。それを総称して「みんなの実家プロジェクト」ということで、ここに13ページにかかわった学生さんの感想等のエピソードが載っている。関わった学生さん自身も、まだこれから自分が子供を持つかもしれないところで、子育てを体験するという二重の意味で役に立つというよなお話である。

15ページは、荒川区の子ども家庭支援センターに電話をかけたときに、ファクスで送ってくださった「駅たま」ということで、チラシを載せた。

最後、八王子市だが、16ページから割愛するのが難しかったので、ずっと一固まりに載せさせていただいたが、私のほうで御紹介させていただきたいと思ったのが、22ページの下の方、星マークで囲ませていただいた箇所である。子育て応援団(Beeネット)の取り組みというところで、より身近なところで子どもたちや子育て家庭を支えるために、多様な世代のさまざまな立場の人がかかわり、地域の中で子どもや親が安心して集い助け合える出会いの仕組みを「子育て応援団」として立ち上げましたということである。具体例としては、「じいじい、ばあばあの子育て相談」というのを始めた。職員が老人会を回り、子供たちのために力をかしてくださいということで、もうあなたができる何でも、植木の世話でも何でもいいんですってということで声をかけて歩いて、お年寄りだけではなく、地域の方たちの力を得て、例えばある方はお母さんたちの相談に乗ってくださると。その「じいじいばあばあの子育て相談」で、一番お母さんがうれしかったのは、スーパーでまたそのおばあさんとお会いになったときに、「あら、元気」って声をかけてくれた、そういう顔見知り地域の中にできたっていうのが一番嬉しかったというような感想を聞かれたということである。あと、ある方は、植木の世話をするのが大変得意な方で、学校に行ってその花壇の世話をしている中で、子供たちとコミュニケーションをとって、その地域の子供たちと顔見知りになって、道でも声をかけられるような関係ができたとか、そういったことをやっていますと。BeeネットのBeeは英語の蜂のことで、八王子の「ハチ」とかけていますということだった。

○福富部会長

世田谷の取り組み、荒川さんの取り組み、八王子の取り組み、もちろん自治体単位での御説明があったわけですが、今の御説明に関して何か御質問あるか。

○委員

荒川区の事業について

○事務局

これは、どちらかというところ、ここに出ている核になる教授がおられて、そこで育てていらっしゃる学生さんの働きが大変大きいようである。だから、さっきの世田谷の学生ボランティア派遣事業にしても、この荒川区の事業にしても、中心になられている方が大学の教授でおられ、また、みずから助産師でおられ、育てていらっしゃる学生さんがおられてということ、うまく回っているというところにポイントがあるようである。

○福富部会長

まとめの中でも触れたが、こちら側から、行政、今区側からの家庭に対する積極的な、あ

るいはこちらからのアクションという形で、いわゆるアウトソーシングというか、国際的な取り組みの例として、委員からホームスタートのケースをお聞きした。それについてもう少し今回、もう少し詳しい状況をお願いしたい。

ホームスタート **資料4** 区民委員

○委員

もう少し全般的な話をということで、今日は御用意いただいたこの資料がパワーポイントのスライドになっている。現在イギリスとして330カ所以上のいわゆるスキームと呼ばれる各地ごとの都市といったのがあるが、ホームスタートという国単位の組織が世界に広がっており、さらに国ごとのいろいろな活動を支援する組織として、ホームスタートインターナショナルというのが実は立ち上がっている。こちらの理事長が女性の方だが、彼女をお呼びして全国九州から関東までというところで、ホームスタートインターナショナルというのはいくつかの事例を概略として説明するために勉強会を開催したときに使った資料である。

まず、ホームスタート、親同士の助け合いというタイトルがあるとおり、すべての人ではないが、近くの多くの方がいわゆる親として子供を育てた経験もあり、それをもとにお互いに助け合いましょうという理念である。なぜホームスタートなのかという次の3枚の説明部分だが、ここも非常に孤立というか、そもそもというところで、特例の子供の現状をしっかり押さえられて、その次に子供というのは、親と一緒に暮らすという権利があるから、それぞれの権利を擁護するために、施設に離して暮らさなければならない状況を避けるために、行動しましょうというところにリンクをされているということである。それと、すべての精神疾患の方もそうだが、様々な民族にも家族にかかわる目標というのは、当然賛同していることなので、私たちも当然この状況を意識していかなければならないという最初の理念が確認事項になっている。

それから3枚目の写真の上で、何故ホームスタートなのかというところなんてすけれども、いわゆる虐待というものに関しては、一代だけじゃなくて、虐待を受けた親がさらにその次の子供に対しても、やはりなかなか愛情を持って子育てすることができないという面では、苦渋感があると。そういったものを断ち切るために、少しでもサポートをできるようにという理念をもって始まるわけである。この写真自体は、オーストラリアの自治体に支援を受けている親子の写真で、オーストラリアのほうでは現在30カ所立ち上がっているというお話だった。

次のページだが、ホームスタートの活動とはということで、困難を抱えている親のピア・サポート、個人に対しての総合支援ですということである。従って、基本、1人以上の未就学児を抱えた家族とあるが、5歳未満のお子様も1人でもおられる家庭であれば支援対象として動きますということになっている。3人兄弟の場合であって一番下のお子さんが5歳未満であれば支援しますよというふうになっている。ケアサポートということで、基本的に家庭に行かれる方は、ボランティアということで、そのボランティアの方を支えるサポートが中心的にたまたまあるということになっている。

1のホームスタートの活動とは、ネットワークづくりというふうにあるが、一応そのコーディネーターという方がコーディネーターのプロである。そのコーディネーターは、いわゆる有償の方で、この方がそういったボランティアの研修も実施し、なおかつマッチングと呼ばれる家族の奉仕に行き事情をお聞きし、ああ、こんなことがあったら、こういう病気なんだったら、こういうボランティアの人がこの人も同じような経験をしたから、じゃきっといいだろうとか、そういったマッチングを行っていくというシステムになっている。あとは、当然その組織を運営していくためには、コーディネーターであるとか、あるいは金融関係のマネジメントスタッフであるとか、あるいは事務局的な活動をする方であるとか、大きさによってまちまちだが、3人でやっているところもあれば、本当に立ち上げまで1人でやっていたところもある。あとは、地域に根差した活動のところでは、地域運営委員会というふうな名称の言葉が出てはいるんですが、これはいわゆる厳密に訳すと消費金融という言葉になるんですけども、その金融を進めていくためのいわゆる学区サポートをする老人会とか、理事長がいて運営している組織が存在する。

これは、伺ったときにいろいろお尋ねした項目でもあったが、地区運営委員会の皆さんが実は説明会に来てくださって、そこにおいて自分はこんなことをやっているんだということをおっしゃったんですが、どちらかというと、日本の場合で何々教授ですとか、何々協議会とかということ、余り実務にかかわらないというか、名誉職というところちょっと語弊があるかもしれませんが、余り機能的でないケースが多く見られる印象があるが、お話を聞いた方は、本当に会計面ではいわゆる経営コンサルタントぎみに数値をチェックして、この上からこうだからこれはこういうふうにご利用したほうがいいよというような、本当に役に立つアドバイスをされる方がおられたりする。あるいは地域でいろいろなビジネスネットワークを持っていらっしゃる方が役員に入り、寄附の関係の担当に対して具体的なアドバイスをされたり、そういったことをされるいろいろな立場の方が運営委員会が、1つの支える組織としてある

という感じである。

地域をそうやって支えるいろいろな立場の方々がいて、そしてその方は有給ではない。ボランティアでその運営委員会をし、コーディネーターの方は有償でボランティアに対する支援のいろいろな仕事をし、ボランティアは無償という3つの層に統一して運営されている。では組織を立てるときにどういう人を選んだほうがいいのかとか、そういったところに関しては、色々の問題があるようで、ホームスタート英国としては、次に立ち上げるときに、こういうところに気をつけなさいよというあらゆるアドバイスと支援を国組織のほうがしていくというような対策を講じている。

ホームスタートが提供するものは、フレンドリーシップと人間的な援助で、精神面の支援であり、ボランティアだということに徹しておられた。その理由は何かということ、お手伝いをしようという気持ちがあって、ヘルパーで行くのだが、やはりいつでもボランティアで来てくれることと、お金のいる人より若いということで、やはり関係する方で大きな違いがあるでしょうということをお話されていた。もちろんヘルパーさんも一緒に頼めばいいし、かといってボランティアでないとしても、フレンドシップの部分をベースにすればホームスタートですよというような話がありました。

特色としては、現実的には1週間に1度、2時間というのを基本単位にして、まちのボランティアのところに派遣を要望している。それで、ボランティアといったときに、先ほどの学生さんに対するアドバイスがあったようですけれども、何かあったときには、その行ったときに実はこうだったということをお話を、相談を受ける体制をつくったりしている。そうしたときにどうだったかという情報、あるいは報告、レポート、そういったものも様式はきちんと決まっていますので、そういったところでちゃんと情報も管理をしながら、適切なアドバイスをボランティアの方にして、うまくリードしておられる。

なぜボランティアなのかということと並行しているが、結局プロの方というか、保育士さんであるとか、そういう方が訪問する、もちろんそれも大事であるけれども、そういった保育士さんが訪問したときに受けとめる言葉と、ボランティアがその一定の会話の中で得る情報だったり、受けとめ方がかなり違うでしょうという話をされていた。

例えば何か保育士さんや保健師さんが勧めたら、しなければいけないんだと思ってしまうけれども、ボランティアであれば、そうはとらないだろう。1つのそれは極端な例としておっしゃっていたんですけれども、そういう立場の違う、だからこそ、いい効果があらわれることでもあるという状況だった。

どんなボランティアがいて、どんな形でやるのかというのは、1973年に英国にて始まり、今の日本と同じような社会状況があったので、それを何とか活用しようということで、1人の女性が始め、広がったということである。現在では、17カ国、デンマークの昨年の秋にでき上がりましたので、17カ国が今現在活動をしている。世界的にはボランティアの活動があるが、ケニアですとかアフリカの国もあれば、ヨーロッパそれからアジアのスリランカも行われていますし、いろいろな国で実践をされている。本当にまだまだ生活を送るだけでも苦しい国もあるし、あるいは先進国と言われているところもあるが、とにかく言えることは、子育てが大変であるという状況は、どんな計画準備をやらせても変わりはない、このシステムはどこでも役に立っているとおっしゃっていた。

ボランティアは、こうした写真にあるような年配の方で、シルバー層の方々は、自分自身は当然のことだと思っておられる。もう一度子育てのことで何かお手伝いしたいという方があれば、30代ぐらいでも、御自身のお子さんの子育てが終わった方であったりとか、いろいろな方がいらっしゃいますということであった。買い物などと一緒にすることもあるが、いわゆる運転手とかヘルパーではないので、お友達感覚で、じゃ一緒に行きましょうかという感じで行くことは当然あるけれども、それが、買い物したいから車を出してってということではないんですよという。南アフリカのボランティアの方で、彼女たち御自身も生活していて苦しい。だけれども、さらに苦しい家庭を支援しているというのが現状。あるいは右側はイスラエルの方たちで、右がボランティアの方、左側はそのオーガナイザー。右のボランティアの方は20年以上ここで暮らしている方でもある。

対象の方に関しては、この丸い絵のイチゴの中の2人がそうだが、社会人とかあるいは右の写真のように、お母さんが障害者である方や、ありとあらゆるスタッフに対しての支援をしている。そして、どのぐらい、例えばドメスティックバイオレンスであったりとか、アルコール中毒であったりとか、本当にそういったことに踏み込んでいる国もあれば、もうそういうところは逆に一切何の処置もやらないで、専門家に話しますという体制づくりがそれぞれの国においてシステムが違うので、対応は任せているというようなことでやっている。

地域でやっている部活動、ボランティア精神とそれから子供会の状況の研修、これの支援についての日本語化を、今、次年度からこの1年間でみっちり私たちがやろうというふうに今準備をしている。

○福富部会長

幾つか興味深いシーンがあったかと思う。何か御質問があるか。なければ協議に入りたい

と思うが、その協議の前に、協議を少し効率化するために、資料5というものがあるかと思
います。ここで事務局に少し状況も含めて整理していただきたいので、資料5について、簡
単に。

(4) 家庭の状況と支援の必要性・新宿区における子育て家庭への支援体制の変遷

資料5 子ども家庭課

○事務局

資料5は、実は東京都作成の「要支援家庭の把握と支援のための母子保健事業のガイドラ
イン」を、ベースにしてまとめさせていただいた。資料5の表面に、三角形のピラミッドが
あり、虐待群、虐待予備群、育児不安群、健康群というふうになっている。先ほど
福富部会長が冒頭のところで、今までの議論の振り返りをしてくださいましたけれども、恐
らくその区民の立場から御支援ができる状況の御家庭というのは、このより緊急性の高いと
ころよりも、もう少しその健康群に近づいたところ、その育児不安群から健康群のところな
のかというところで、微妙に専門的な支援と重ねて書いてみた。区民からの支援というこ
とで、必ずしも御家庭という単位ではなくて、その中の子供さんに対してだったり、親御さん
に対してだったり、同居しているおじいちゃんやおばあちゃんに対してであったり、いろい
ろな形での支援というのが考えられると思う。この向かって左側のその家庭の状況のところ
で矢印を上下につけたのは、その支援の仕方やその家庭の力、そのエンパワメントによっ
て、健康群から育児不安群に移行してしまう場合もあるだろうし、逆にその育児不安群から
健康群に発展していく、回復していくこともあるでしょうし、そういうところを行き来しな
がらいるのかなというところで、こんな図にしてみた。

裏面を見ていただくと、これは実は私自身保育園の入園の係にありましたときに、
まだ子ども家庭支援センターがなかった。園長先生たちから、どうもこの子は虐待を受けて
いるみたいなのというような御相談をいただいたときに、とりあえずワーカーがいる場所と
思って生活福祉課に電話をかけたら、そこはその御家庭は母子家庭ですかって聞かれて、そ
れで母子家庭じゃないので、母子家庭じゃありませんと言ったら、それじゃ母子相談員じゃ
ないな、そこは生活保護の世帯ですかって、いや、生活保護を受けていないんだ。そうする
と生保のワーカーでもないなあ、ごらんの要支援世帯だがけれども、子供さんがSOS状態
なんです、うーん、そうすると児相ですかねっていうことで。ただ、まだその段階では、
その児童相談センターにつなぐまでには至らないけれども、区のレベルで何ができるんだろ
うっていうところで。そこのところから第1段階で、その関係機関がばらばらにアプローチ

している。想像していただくと私が1人で、またはかかわっている保育園が1人で抱えて困っている状態で、第2段階がそうやって関係機関の一部が、個々に連絡をとり合って、かかわり合っていて、第3段階が関係機関が個々に相互に連絡をとり合ってアプローチしているというのが、さらにもう少しぐると広い範囲に相互関係がなってくるので、第4段階のところ、やっと子ども家庭支援センターが登場しまして、子ども家庭支援センターが中心になり、各関係機関の当面役割分担を確認した上で、計画的にアプローチしているところ、今かなというところで図をつくってみた。

で、第5段階、これからの姿っていうのは、ネットワークづくりというところで、どこら辺を目指していけばいいのかということで、今までの変遷をたどってみた。

○福富部会長

ようやく協議に入りたいと思うが、ようやくこの部会の主題、いろいろな虐待ということに対して、どうぞ皆さんから具体的に何かないか。

○委員

今最後に事務局が、第1段階、第2段階いうふうな形で説明してくれたが、今の現状というのは、これは第1段階からすぐ第4段階までいっているってことですか。

○事務局

子ども家庭支援センター長、いかがか。

○委員

今の説明を聞いていて、うんと詰まってしまったのは、計画的にアプローチして、次の第4段階で、これではないだろうかと。子ども家庭支援センターが一応中心となって、いろいろな子供にかかわる機関のお互いに情報を共有して、これから何をやっていくかという役割分担するという、そんなところまでは何とかやっていくわけだが、計画的に今後を見据えてやっていくという段階には至っていない。その理由として大きな理由は、次々に新しいケースに追われているというところで、より重いケースをやらなければということで、少し落ちついた状況のケースをずっと計画的に維持するのは、なかなかできていない。

○委員

でも、今の現在というのは、第2段階、第3段階はもうある程度飛ばして、第4段階、計画的には行っていないけれども、そういうふうにもずだれかが何かアプローチすれば、そういう子ども家庭支援センターがやってくれるという段階か。

○委員

子ども家庭支援センターがそういうことを気がついた機関が御連絡をされた段階で、動いて、それぞれのお子さん、その御家庭にかかわる情報をお互いに共有しましょうという機会を設けた。その要保護児童支援対策協議会、何回か出てきましたけれども、児童福祉法の中で規定されているそういう協議会の中で動いているという状況だと思う。

○委員

わかった。

○福富部会長

ほかに何か。

○委員

感想めいた意見で恐縮だが、児童相談所の役割は、両方のいわゆる協議会で説明していただいたまさに要保護児童であって、いわゆる平たく言えば要保護児童としてリストアップされた子への対応となると思う。今おっしゃったとおり、やはりこう概念的に進んでいって、今2、3ていうのはほとんどなくて4かなってなことになるんです。これはケースによってまさに2、3のところはどうしようかというところで、恐らく子ども家庭支援センターもまだ来ていないようなケースもいっぱいあるわけである。ケースによってやはり違って来るんだろうなと。ある程度この子は、いろいろ役割分担はあるが、どうしたらいいかというところまで上がってくるというか、皆さんで挑戦して動けば、第4段階でそれに応じるということになるが、どこの部でもありますように、そういう緊急性もある程度ないようなところで、もう少し底辺を広くさせるとなると、まさにここの辺が生き生きする。第2もあれば第1もあれば第3というのもいっぱいある、それが現状だと思う。

○委員

いやいや、私も改めてそういう言葉を伺うと自分で確認するような発言をしているだけなのだが。

○委員

非常に立場、立場でわかるが、やはり例えばいろいろな小さいいろいろな事象があると思うが、それをやはり子ども家庭支援センターで全部把握しておいて、それはこれに頼む、これに頼むと回すってというようなことは。

○委員

理想ではあるが。

○委員

理想だと思う。今ここの部会で問題になっているのは、その第5段階をどうしようかっていう話か。それもそうだが、この子ども家庭支援センターが、そのだけの情報を集めてやはり発信してくると、計画的にアプローチしていただければ、一番効率的だと思うのだが。

○福富部会長

ちょっとよろしいですか。議論を整理したいのだが、最後の第1段階から第4段階は、余りここに振り回されると問題の質が変わってきてしまうのではないかと。というのは、私どもが議論すべきことは何かというと、実際に要保護児童というのがいる。非常に緊急性のある子供がいる。そういった子供をいかに区民の中から洗い出し、そこに移行するという体制をつくるということではないんだと思う。それは我々区民というか、本当に普通の家庭の中で何かちょっときっかけがあるとすぐ行ってしまうということ、いかにその前で食い止めることができないだろうかという話だと思う。緊急性のある人はこれは専門家に任せなければいけないわけでして、これは区民がそれこそ疑心暗鬼して、あの家庭はおかしいとかなんとかってすぐセンターに通報する、そういう体制づくりをするっていうのは違うのかという気はする。

○委員

そう思う。それで、具体的に先ほどの例というのは、いろいろまざっているわけで、実際にはいろいろな、この子ちょっと危険ではないかという子は学校にぼつぼついるわけである。だから、そこに気がつくかどうかというのもまずある。もう一つ、その子にどう対応したらいいかというのが、例えば学校にあったとした場合に、どうしたらいいかというのは、やはり方法論が要保護という場合だったらもう育つしかないんで、これはもうある意味はっきりしているし、例えば子ども家庭支援センターに持っていくというのも、1つの方法だと思う。しかし、例えば私たちもキャンプに連れていったりしますのを見ているが、例えば親は親があつと怒りつける親がいて、子供は攻撃したりする。やはり親が、例えば僕らが声をかけても、追える視線を変えないみたいな子はやはりいる。例えばそういう子たちというのをどういうふうに、母親とか父親からは甘やかされていないけれども、ほかの大人たちが例えばどういうふうにかかわって、その子が、大人って捨てたものじゃないぞというふうに思えれば、信頼できる大人の話は聞くとかいうことも出てきたりする。何かそういうような体制をどうつくるかみたいなことではないかと僕は思う。そういうのを幅広くつくるのがやはり今必要になっているのではないかという気がする。

○福富部会長

だから、さっきのイギリスのケースなんかは、これは新宿でそのままできるかどうか、これは非常に議論しなければならないと思うが、家庭に入って行って、そこで話をしていくということの積み重ねが、防止につながるかもしれない。

○委員

もちろん、対個人でとにかく私のためにわざわざ話に来てくれるというところでのステージメント効果もあるんですけども、これはどこに行くかというところに関しては、その子の中にいるわけです。これだけ歴史があることを気になっていて連れてきたのに、父親のほうからやったほうがいいじゃない、どう、こういうのもあるけれども連絡してみるみたいな感じの地域ごとの、そういう意味では不徹底があることがあると同時に、地域の人との競合、こんな面があるよということを言ってくれる人がまずあるというところで、ネットワークがあるということ。今度、この人にやはりちょっとこういう自分ではもうここが限界だ、だからその部分の情報とはいうと、コーディネーターが、こういうところがあるからこういうところを勧めてあげたらみたいなことを言って支援しているわけである。そういう情報共有的なネットワークというのは、基盤としてもあるということなので、それがやはりないと、このホームスタートというのは、今で言うと、ただ1カ所で終わりというのではないことになるので、本当に必要だと思う。情報は当然大事で、それは図書館とか広場とかいろいろなことに参加していくことのためには、少しずつ外に一緒に行って、逆にもう黙ってもう家庭に一々行かなくても、自力でそういったところに行くよになってもらえれば、ある意味その役割は終わり、また次の対象者というふうに回転をしていくようになっていくということ、いい意味の事例ができるようになっていくというのが、1つのネットワークではないかなと感じる。

○委員

事例を蓄積して、みんなでつなげるというのは物すごく大事だと思う。やはり話をしてくれるようになるかどうかというのもある。この人だったら話をしても信頼をして初めて自分でいろいろなことが話せるわけで、その前に、例えばいろいろなことを根掘り葉掘り聞かれたとしたら、やはりだめである。絶対言わない。自分が言いたくないことを抱えているからいろいろな思いがあるのであって、そういうものを出せるためには、やはりそっとそばにいて、様子を見てちょっとしたことを応援してくれるような関係を持てるボランティアとか、そういうものにすぎたことがある。そういうのをどれだけつくるかっていうのを考えたほうが。

○委員

ホームスタートは特に現在まででは、保育士さんやあるいは向こうで言う方というのはソーシャルワーカーさんや、そういったところの方が、こういうのがあるけれどもどうですかと強制はできないので、ボランティアで行く場合も当然同意をし、サービスを受ける側も同意をしないとスタートしなというサービスがある。

○委員

いわゆる日本で言う「こんにちは赤ちゃん事業」みたいに、コンコンとノックした時に、いいと思ったら、そこで自分はその段階で受けないけれども、こういうのがあるわよというふうにつなぐ。保健師さんが見つないでそういうボランティア活動を続けていったらというふうに関係をつくるっているというのがほとんどである。

○委員

まずはいろいろ仕掛けて、仕掛けるじゃないけれども、幅広くその中でやるというふうになるのか。

○委員

あとはやはり年数を重ねていって、これだけ組織だっていうので、それこそボランティアを募集するのに新聞広告だけではなく、いろいろな周知方法で周知している。なおかつ、個人的にそういう必要とする方に声をかけるのは、保健師さんだったり、ソーシャルワーカーさんだったりというふうにおっしゃっている。地元のそういう方にどうやって子どもを理解してもらえるかというのは、最初すごく大事だというふうに言われている。

○福富部会長

大体申し上げていることだが、やはり日本であるいは新宿区でそれを総合するとなると、やはりいろいろなところで議論していると思う。伺っただけでも何かのサポートに対する国民意識というか、意識に文化的な違いがある。かなり欧米だとメンタルなことをすぐ相談するなり、そういうようなある社会的な土壌ができていく国と、仕組みかと、それがかなりない国では違う。最近でこそ心理相談員とか、いわゆるカウンセラーというのが、最近日本でもようやく話題になりつつあるが、まだまだカウンセラー、それ自身に対する専門家に対する認識が違うところがある。そういうところでも導入するかということは、出発点、御指摘のようにとても難しいなという気はする。ただ持して待つということだけではない活動があるということは、何かちょっとヒントになるのかなというふうな。

○委員

この前の協議会でちょっとお話しさせていただいたが、児童委員は赤ちゃんが生まれたばかりのご家庭の名簿を出していただきまして、その質、機構というのをちゃんとした上で、ご家庭にパンフレットを全部持って伺う。それでいらして受けてくださった方には、基本が面談でお渡しするんですが、やはり問題意識は40%ぐらいで、あとは面談はできていないが、これをもうちょっと生かしてほしいというのが私たちの希望である。それで、新しく転居されてきた方もこれは行かないですね。1年2カ月とかで入ったところも、これは行かない。これは各保健所とか家庭支援センターとの連携が必要である。

○福富部会長

確認だが、とにかく最初はその対象のお子さんを持つ家庭にすべて伺うわけか。

○委員

そうである。

○委員

保健センターの方でやっている「こんにちは赤ちゃん事業」があるということが、新生児訪問は実際に行きますと、行ってもいいですかというので、返事が返ってきたところに伺うというところで、来てほしいというところしか行かないというところが問題である。

○委員

この第4段階のところ、やはりそういう情報を民生さんとか地域に回っている人が、やはりどこに相談すると言ったら、それを家庭支援センターに一括して、こういう子がいますよってというような形で、まずは始めないといけないと思う。それに基づいて、やはりプロはプロなり方にやってもらうというような形で、常時段階を追って第5段階になるのではないかと思う。ただ、民生の場合、厚生省の管轄であるから、ネットワークを横に広げて……。

○委員

民生・児童委員については、要保護児童対策地域協議会のメンバーにすべての方が登録されている。

○委員

新宿区は、事業もかなり充実している、それからその後のいろいろな検討もすごく充実しているが、例えば今のお話のように、生まれた赤ちゃんに対してたった1回のチャンス、それではうまく病院の段階で、あるいはいろいろな研修の段階でさまざまなことが行われているときに、本当に重要な情報が繰り返し必要なときに考えるようなしくみがやはり欠けているのかなと思うがいかがか。それで、非常によく整理はしていただいたが、この裏表ともに

整理されていて、物事を考えるときにこういった一度整理してみるのはいいが、これが混沌としてあって、そしてそれぞれが生かされていて今の状況があるという中で、この図をもう1人で考えて、こういったことをチェックしながら現実にはどこがどんなふうにつながっていったらいいのか、あるいは、横も、ずっと子供の人生を赤ちゃんのときからきつい環境を持ってというような、その立場をもっと打ち出せると、生きてくるのかなというふうに思った。

資料5の表のほうも4つの段階に分けてこれは間違いではないが、もう本当にそういうところは何とも言えない状況である。それだけ家族が皆不安定な状況にもあるし、かといってみんなが病的であるというわけでもないで、そのあたりもう一回整理をすると。そしてそこでそれぞれ機能している人が、前に専門職として機能している方と、これから他の区でいろいろ学生も含めてボランティアの養成をして機能していた。ここの研修が先ほどこれからだとおっしゃったが、私もちょっとお聞きしたいなと思ったのが、例えばこのホームスタートの取り組みはというところで、家族に会うボランティアを慎重にといって、それぞれの家族に会うようなボランティアの申し出をするっていうことが大変危険である。今の段階で、有償のままであったのか、ちょっと何かあったら教えていただけるか。全国的に専門職とは違う習慣的な問題である人たちの養成は、新宿もやはりここはこれから力を入れていかなければならないと考えている。

○委員

まず、もとなるのは英語の研修は各地である。それで、それこそ傾聴や、あるいはその区の奉仕活動そのもののいろいろな実習をして、レポートをして分析をして、また評価を得てというふうな、はっきり言ってそういうシステムがよくできているのがある。実際に自分がなったときに、どういうことをしなきゃならないですかと、マネジメント的な部分も読む必要があるということになっている。そういうものと恐らくこのシステムの中でどうやってより効果的にあなたがボランティアとしてやっていけるかという、その辺を理解していくところも一番含まれている気がする。なおかつ、それを実際に終わったときに、ちゃんと実践として役に立っていただく場も当然あるということなので、そのステップがあるというのがちょっとやはり今のところなかなか日本ではないシステムである。

○委員

ボランティアのイギリスの話のように、やはりいかに文化が違えば情報が違う。そういう中でそれぞれ日本で行われているものと、それから、どの部分を日本に新宿区に活用できる

のかというのを考えていくんだと思いますけれども、一番根っこになるこれだけは大事よってというようなものはどうなのか。

○委員

いろいろな国でやはり文化も違うので、当然そのかわりかそれはある程度改善になると言われているところが、このある種クオリティーを維持するためにはここだけは変えるなという7つあると言われている。その中のひとつがボランティアということである。本当にこれからやっていかなければいけないが、あるいは日本人のメンタリズムの中で、どういうふうな未来の教育としてやるかということをして4月から1年間かけて、よく考えていないということはみんなもう感じている。このシステムを使って、どういうふうにやっていただくのかという気持ちはあるが、それこそ完全に主導でやりたいという声もあるかもしれないし、行政の方の協力もあるかもしれないし、それぞれの方々がどういう状態、日本の今の状況という形、そんな方法についてもまたいろいろと支援をする、それを支援する側になればいいんですけども、うまくいかないなという話を今している。

○福富部会長

ほかにどなたか。

○委員

児相で、それこそ本当に緊急性の高いというか、そういうお子さんたちを日常的に扱われているだろうと思うが、そういう日常的な子供あるいは家庭を扱っていくと、もう少しここがもしなかったら、あるいは仮にというのは非常に意味がないのかもしれないが、そういうお気持ちというのは多々あるのではないかと思います。この点さえ親が何とかしてくれたらとか、ここに気づいてくれたら、そういうポイントは何かないか。

○委員

親自身の意識も含めて言えばそれは理想で、そこはそういう義務はなくなるということになるが、言ってしまうえば、あきらめているわけじゃないが、親自身も、厳しい環境の中でももう20年、30年来ているので、そこは大きく言えば社会のありよう自体も問わなければならないようなところの問題になってきている。もう、それは現実をどう見るかから始めざるを得ないということである。やはり皆さんもよく御理解されているようなところも、改めて私どもは、完全にいかに孤立しているかということに尽きてしまう。実態としては、何でひとり親家庭なのかと思っても始まらない。非常に家庭崩壊した家庭が多いということは現実である。しかし、その人はその人なりの人生観かけて子供に向かい合っている場面というのは普通に

あるわけである。地域が何か気づき合って支え合えたら、ここまでならなかったのかなというところが、もう率直に実感として感じるところである。

○福富部会長

日本というのは、近隣というか個っていうものがかなりあいまいな状況の中での人づき合いというのをしてきた国だと思う。欧米型というのは、生まれたときから、非常にインディビジュアル的な個ということを強調している。そういう大きな違いから考える。最近、日本がそういうぼあっとしている中で孤立してしまうという状況というのは、ものすごく逆にシビアな状況が生まれる。だから、最初から個が自立している状況の中だと、その中でどう援助していくのか、どうサポートしていくのかというそれなりのノウハウというものはある意味ではわかるし、その1つのパターンとして、今のイギリス型のホームスタートみたいなものが、その延長にあるのかなという気がする。日本の場合には、もっとみんながぼあっとしている状況の中で孤立してしまうというのはものすごくしんどいこと。そこをどう支えていくのかというところが、本当に大切なのかなという気がする。

さて、それをどうしたらいいのか。いかがか。

○委員

実はつい最近、記念福祉財団から30万円支援をもらって、支援グループペアレントのキャンプというのをやった。そこで集まってきた人たちが、母子家庭ということで、非常にマイナスイメージを持っているというのがある。一般の人たちと一緒に遊びに行くと、自分のところのことを聞かれるんじゃないかという思いがある。だから、まだそういうところに行けない。だから、こんな機会があるのは待っていましたっていうような感じの意見が多い。そういう人たちがお互いに交流していくためには、一步その前の段階の交流とか、相互同士の支え合いみたいなものが、必要かなというのを改めて思った。

○委員

保育園は生まれたばかりのお子さんもお預かりしている。地域のお預かりしていないお子さんについても、園庭開放があったり、保育園で遊びませんかというようなことを、どんどん子育て支援でやっている。生まれきたお子さんに対しては、中での支援はできるが、赤ちゃんがおなかに入っているときに、今から丈夫な赤ちゃんを産むんだよっていう、そういうお母さんに関しては、何も私たちはできない。生まれきたお子さんに対しては地域から見えるように、もうちょっと前にも赤ちゃんを楽しみに産みますよというときに、でも生まれきたら本当どうすればいいかわからないような状況のお母さんたちを何とか支える方法

があれば、生まれてからも、あそこの保育園で園庭開放があるから行こうかなって出てこれると思う。やはり出てこれないで保育支援というか、閉じこもっているお母さんがいる場合、産前の段階で何らかの形で、その地域の保育園の方たちも含めて、保健師さんたちとそれで私たちも何かできることがあればいいかなというのを思っている。

○福富部会長

新宿の場合はこれだけの学校、大学を抱えているわけで、さっきの荒川、世田谷もそうだが、学生っていう人材を活用しないという気もする。

○委員

今どこの大学でも子育て支援というところでの関係はある。私が今思うのは、やはり就学年や学ぶ前からの基本を、もう少し具体的に基礎をつくっていくときに、学生ですから本当に不十分な点もいろいろあるかと思う。でもその分、その若さや、それからかわりしなからというような関係の中で、もっともっと入りやすい良い関係ができるかもしれない。ただ、この絵にもあったように、そこにはやはり核になる問題がないと、継続性とそれから人を担保するというところが不可能だろと思う。でも、これは大学にとっても、これから、地域と一緒に手をつないでやっていくことが重要なことで、これは次に私もやりたと思っている。

それで、ちょっと質問させていただきたいのは、その資料の世田谷7ページのステージのところ、産前・産後支援事業の利用状況が平成17から18年のこの間に物すごく伸びている。これだけの効果が短期間にあって、そしてもう少しこれだけの内容を知りたいなということ思った。そのことが、例えば民生委員の方々のいわゆるこれもメインになると思うんですね。それから、今まで言われていることかと思うが、石川県の金沢で行っているマイ保育園というような、生まれる前にもう私の保育園というのが決まって、そして何かあったらその保育園とも関係を持っていくというしくみである。これは石川県金沢市だからできるという要素もあるが、ぜひそういう先行事例を、取り組みの中から、特に世田谷のこの取り組みのところで、もうちょっと具体的に内容を検討することのように進めていくというのはできるのではないかなと思う。

○委員

例えば、保育園などに、大学生をイメージするのではなく、大都市は若い中学生、高校生たちをもし入れるとすると、違った世代のかかわりもできるし、その子供たちがまた次の世代を生むわけである。その子供には家庭があるわけなので、そういう形での広がりみたいなものというのは、実は多くつくられている。

○委員

今までの話の中で、どんなシステムをつくるとか、どんなことがいいとかっていう話が非常に多かったと思うが、この一番最初の題の、子ども虐待防止と地域の役割というところに話を持っていくと、やはりその地域に根差した例えば民生委員さんや、PTAも含めて、そういう方たちの気持ちの高まりをつくっていくことが大切だと思う。そうした地域全体を見るということも、一番大きなことだと思う。その中からいろいろなシステムができていき、地域の中全体でそれが取り組めるのが一番いいかなと考えている。その中には、地域の中のボランティアにしても、それがもしかしたら有償になるかもしれないが、やはりすべての人がある程度の使命とか義務という気持ちを持つてくることが必要である。非常にナーバスな問題であり、虐待に限らず地域の生活の中の一部になって、それが100%というのは非常に難しいことだと思うが、そういう意識を持った人が集まって、それなりの行動をしていくということがまず大事ではないかと思う。範囲は広い話になるが、1つあいさつからというものそこから始まってくると思うし、そういう一つ一つの小さな言葉やつながりが、いろいろな波及している問題を解決していく1つになってくのではないかと考えている。

せっかく「地域の役割」という題がついているので、地域として何をやっていけるかということを考えてときには、そのようなことも言えるのではないかと思う。

○福富部会長

今の御発言は、ある意味で興味がある。私どもは困難を抱えている家族、あるいは支援が必要な子供という形で、何か非常にネガティブなものをまずイメージして、そういう子供たちに対して何かサポートしようよというような発想についつい流れてしまう。ところが、私たちができることというのは、そういう問題を抱えている子の問題を探し出すことではなくて、もっと日常的に普通の子供に対してかかわりを持っていくことが、結果的にその防止に供するかもしれないぐらいでいいのかなと。だから、余りにも効果を最初からねらうというのではなくて、こんなことをしておく効果がなくてもいいけれども、実はあったかもしれない。それが先ほどお尋ねしたことだが、やはりそういうものもあると。結局孤立しないで済むかもしれない状況が行政、地域でできることなのかも知れない。我々は問題児を探すとか、そういうことについて特化してしまうと、支援してやるとかそういう形になるが、そこを少しくリアすると、もう少し気軽に肩の荷をおろして、地域でこんなこともできる、いろいろなことができるという自由度も増していけるのかなというような感じを持つ。

○委員

今直面している問題もたくさんあるとは思うが。

○委員

それは、それはそれとして、それがいろいろな意味でそれはいろいろなネットワークとか、そういうものをつくっていくことは必要であるかと思うし、それは全く否定するつもりはありませんけれども。

○委員

さっきの石川県の取り組みだが、私も詳しく聞いたりしている。直接やっておられる方で、とてもシンプルで、さっき地域に生まれた赤ちゃんが、その地域の保育園で無料券を母子手帳と一緒に差し上げる、そしてそれをお母さんが預かる、保育園を利用する目標としてもいいし、何でもいいからそういう支援には使わせていただく、そして、そうすることでお母さんのコミュニケーションが、近くの地域の保育園とできていくので、それである程度カバーできるっていうことはすごくすばらしい話である。無料券があると利用できるっていうシステムがあり、そこにつなげていくということは、保育園にとっても突然会って一時保育に預けられるよりも、段階を経て大人をよく理解して一時保育に進むことがいい形である。そして本当に保育園の必要な方には適当な情報提供を行い、保育園入園という形をとっていくように、私は地域に根差して、その石川県金沢市はすばらしい制度をつくられたんじゃないかなと感じているのだが。

○委員

一番初めて子供を産んだときに、孤立したり子供をどうやって育てていったらいいか、周りにおじいちゃん、おばあちゃんがないし、知っている人もいない。ちょっと新宿区で産んだときに、この先どうやっていけばいいんだろう、買い物一つするのもおどおどしていったっていう、そんな感じで。十何年前なんですけれども、そのときに今みたいな情報がたくさんあると、とても入っていきやすいところである。ちょっとしたきっかけだが、例えば健康群の育児不安というのは、例えば6カ月健診とかちょっと病院に行ったときに、何かちょっとこの子小さいねって、その一言がすごく不安になる。そうすると、ほかの子と比べてだんだん落ち込んでいく。そういうときに何かの地域のイベントがあったときに、あらっというて話しかけてくれて、小さいなんてそんなの関係ないわよって言ってくれれば、それですっと消えるっていう、そこが多分虐待につながらないと思う。しかし、そのお母さんの気持ちとして、別にそういうつもりじゃないんだけど、孤立をするとやはり手を上げてしまったりって、それが虐待につながっていくという気持ちはとてもよく私もわかるし、精神的に

一時的に私も追い詰められたときがあった。そのときにどうしようかって思って、本当にふらふらしながら、でも全然知らない人が話しかけてくれて、ああ、こういうところに児童館にそういう何かあるのよ、何とかクラブがあるのよ、行かないって言われて、そこでちょっと私は乗り切れた部分がある。それを踏まえながら、PTAとしても、その地域の方々とのいろいろな行事に対しても、そういうときがきたときにちょっと声をかけてあげるのも、何かちょっとしゃべっている間に何かきっかけができればという、多分それが私たちの役目だと思う。

とてもいろいろな情報をもっともっと発信をして、生まれた子供に対しても保護していくということもすばらしいことだし、多分拒否をされるということを問題視されるのは現実的にあると思うが、その辺をうまく活用していくと減っていくとは思う。それは乳幼児のときだが、またそれが小学校・中学校に上がってとなると、またちょっと違う部分があると思うが、まずはそこからかなと思った。もっと情報をいろいろなところに発信をしていただけたらなと思っている。

○委員

お年寄りの方がいて、その方が、子育て支援センターに行ったって尋ねられて、私は知らないし、いや行ってないですよっていうことだったが、毎回毎回会うときに言われるので行かなきゃいけないかなと思って来てみたが本当に来てよかったと。そのお母さんが出かけるのがすごくおっくうになっていて、出たほうがいいだろうけれども、何かおむつをかえてミルクをあげてというのに追われ、出かける気持ちがわからなかったと思う。そのお年寄りはとても自然に優しく言ってくれたので、もう1人のお母さんは、お友達を連れてきてくれたが、そちらのお子さんも2歳ぐらいだが、連れてきたおさんは7カ月ぐらいの赤ちゃんだった。そのお母さん自身がやはりお友達にお手伝いしてもらったことがとてもよかった。自分もいつか困っているお母さんがいたら連れてきたいなと思っており、たまたま公園が何かでそのお母さんと立ち話をしたときに、行ったことがないということで、連れていこうと思って連れてきた。遊んだりしないお母さんだったが、やはり自分がしてもらったことをお返ししたかった。そういう本当に小さなつながりが地域の中では大事なのかなと思う。あいさつなどで、声をかけていくということを広めることは、お金もかからない。新宿区は、本当によその地域から転入してくる方も転出する方も多い。

子育てひろばに行くか行かないか。もちろん私たちも来てもらえるような内容を努力することが必要であるが、やはり地域の中で親子がすれ違ったときに、見たことがない親子がた

まにやはりいる。あれ、あの人来てたかなと思ひ、知っているようで意外と知らない。

特に乳幼児は、保育園とか幼稚園につながっていけば、そこで問題があった場合に支援ができるが、支援の場においてもそういうところとつながっていない人たちを支援したというお話があったが、誰かの後押しのない方たちをどうするかということだと思ふ。そのときに、例えば民生委員さんが家庭訪問しているが、6割の人が民生委員さんに会っていない。でも一方で保健センターでは健診をしており、さらに全くだれもアプローチしていないところが出て来て来て、効果的に危険な家庭、困っている家庭に派遣しやすいのではないかと。

でも、その突き合わせをやっているところはどこもないと思ふ。でも、今度子ども家庭支援センターが増えて、地域に沿った形になるが、そうなったときに、個人情報を持っていてもいいと思ふので、大変だとは思ふが、どの支援策からもこぼれ落ちた受け皿として、どうするかということを考えていくといいのかなと思ふ。

子供の110番の家があるが、その子育て販みたいなのがあればいいのではないかと。支援者の要請も大事だが、そうするとやはり3日とか1週間とか時間をとられて、地域の方というのは皆さん忙しい時間だと思ふ。何かもうちょっと気軽にそこに行ったら近所の例えばおむつの特売所の情報を教えてくれるとか、何かそういうもうちょっと難しい時間のかかることじゃないことで、何か考えていただいたらどうかということを考えて。

○福富部会長

せっかく新宿はいい施設があるわけである。それを活用しながらという御意見が出た。

それで、何かここで方向性も見えてきたように思ふが、最後の方の議論の中でやはり我々ができることという形で、次回、来年度のこの部会はまだ続けるのか確認したい。

○事務局

2年間。

○福富部会長

2年間。来年もう1年あるので、もう少しこの段階を踏まえ、具体的、今日は、世田谷の例、荒川の例、それから八王子の例という例も出た。そういうものを踏まえながら、さて新宿区では何ができるだろうかということをもう少し具体的に、余り片意地張らず、区民のレベルでできることというものを少し模索していければ、何か方向性が出るのではないのかなと。きょうは役割上、最初の方でどうしたらいいのかと思つたが、何となくほっとした感じで、先が少し見えつつあるなという気分である。おかげさまで、とても今日は有効な時間をいただいた。来年度もまたよろしくお願ひしたい。

○事務局

今日も、中身の濃い御議論をいただけたのかなと思う。新宿は、この間次世代育成支援計画もつくり、さまざまな事業を充実もしてきたと思っている。ただ、それぞれがちょっとずつ全部を救えていなかったというところが、皆さんのお話から見えてきた。そういうところを、もう少しどうやったら丁寧に結びつけられるとか、区で創っていいのかというところを、事務局のほうとして、もう一回資料づくりの中で検証できるようなものを創って、皆様からの来年度のプランとしては、このところをもうちょっとこうしたらいいんだろうかというようなところに発展をしていただけたらいいかなというふうに事務局としては感じたところである。また来年度もよろしくをお願いしたい。

あと、1つ御報告だが、もう御存じの方もいらっしゃると思うが、来年度、新宿区では組織改正をする。子ども家庭の部分が部として独立をして、子ども家庭部という部ができる。そこでは保育の分野、それから子ども家庭の分野、それからこういう次世代育成支援計画の分野、それから男女共同参画である。また、一部、教育の生涯学習で作成した事業報告が上がって来る。また、連携も、皆様にいろいろ何度も御指摘は受けているが、さらに連携が進み、総合的に子育て支援ができる体制づくりを目指していくので、よろしくをお願いしたい。この次世代育成の協議会については、子ども家庭課が引き続き担当させていただくので、よろしくをお願いしたい。

午後4時00分閉会